

「それは生きた人間を神様に上げることよ」

「おっかねえ 神様だごど」

「『ええか娘が十八になった秋の十月十日

の夜白木の唐櫃からひつに入れて十二時かつきりに

鎮守ちんじゆさま様の森に届けんだぞ、忘れんな。さも

ねいと、この村には火難・水難・餓死とつ

づいて亡ほろびつつまあぞ』と言つて消えてし

まったつうだ」

「庄屋しやうやさま様は悲しい思いをしながらも七人の娘を次々に人身御供ひとみごくうに上げてしまった。さて年

月は水のように流れて最後のたった一人残った娘の番になつてしまった。なんぼ村のため

とは言いながら庄屋夫婦しやうやの悩みは一通りではない。娘を中にして今夜は最後の別れだと名残なごり

を惜おしんでいる時、表の戸口とぐちをトントンと叩たたく音がする。村人が鎮守ちんじゆの森に送つてくれる

